

『ボヴァリー夫人』と『ライ麦畑でつかまえて』 対照研究
型からの脱出と型への進入という空想と現実の差異

飯島 昭典

はじめに

絵画におけるリアリズムは社会のありのままを描き出し、都会の現実をテーマにするという特徴を持つ。バルビゾン派といわれる一群が田舎の生活を描き自然と労働をテーマとした事とは、ありのままを描くという共通点をもつものの、若干の差が見受けられるのではないだろうか。文学におけるリアリズムも現実の悲惨さから目を背けず、逆にそれに注目するという特徴を持ち、1950年代の実存的リアリズムという文学と緩やかなつながりがあるのは言うまでもない。ここで取り上げるのは、フランスリアリズム文学の傑作『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*, 1857)¹と実存的リアリズム時代のアメリカ文学の人気作『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*, 1951)²であり、両作品の比較対照を行う。

一般的にリアリズムの作品は社会の個人への影響を取り上げる。次の引用は『ボヴァリー夫人』のみにあてはまる説明ではなく、広くリアリズム文学に当てはまる特徴のように思える。スティーブン・ヒース(Stephen Heath)の説明をここで引用してみることにする。

It is in its depiction of the movement of social forces and the relation of that movement to money that *Madame Bovary* comes closest in its study of provincial life to the Balzacian model. It is not just that the buying and selling of things and the borrowing and lending of money are a contrast activity in the novel, it is that the novel's very action is financial, strongly determined by this activity. [. . .] (463)

『ボヴァリー夫人』がバルザックのモデルまで狭い生活を扱う上で精密に研

究しているのは、社会の力という動きとその動きと金との関連についての描写である。物の売買、金の貸し借りが小説で明らかに行われる活動になっているだけではなく、こうした活動によってまさに小説が、財政を特徴とする作品として定義されており、これらの活動によって強く決定されているのである。……

経済活動という社会の動きそのものを『ボヴァリー夫人』の説明としているヒースである。リアリズム文学全般に当てはまるということがわかるのではないだろうか。

しかし、社会の動きが個人の意識に影響し、それに注目するのもリアリズム文学の特徴である。生き方を不確実な価値観の中で、自分自身で決めなければならないとする実存的リアリズムの文学においても、自己決定の特徴はまさに主人公の意識に注目している。ヘンリー・ジェイムズ(Henry James)は「フローベールは作品中でエマ・ボヴァリーを想像力という習慣の犠牲者としている」(“ [Flaubert] was doing for his book in making Emma Bovary a victim of the imaginative habit ”)(411)とし、『ボヴァリー夫人』という作品の主人公の意識に注目している。³そしてジョイス・ロウ(Joyce Rowe)は、「ホールデンもまた望みのない展望に執着してしまっており、自分の現実への嫌悪をさらに鋭いものにしてしまっている」(“ Holden too is committed to a hopeless vision that makes all the more acute his disgust with the actual ”)(80)とやはり主人公の意識に注目している。

ギュスターブ・フローベール(Gustave Flaubert, 1821-1880)の『ボヴァリー夫人』とJ・D・サリンジャー(J. D. Salinger, 1919-2010)の『ライ麦畑でつかまえて』は、時代は異なるものの、リアリズムの類型として、そして主人公の意思に分析の重きを置く事ができる文学として、共通点を持つのである。

『ボヴァリー夫人』の主人公エマも『ライ麦畑でつかまえて』の主人公ホールデンも現実に潰される主人公である。ここでは二人の現実を前にしての空想について差があるのではないだろうか、という事を本稿の論題としたいと思う。リアリズム時代の文学の主人公であるエマのロマン的空想と実存的リアリズムの時代の主人公であるホールデンの空想には、一体どんな差があるのだろうか。望みどおりにならない現実を前にしての二人の主人公が行う空想と現実との関係が本稿によって、明らかになるはずである。

1. 上昇気流と見えないものへの願望

結婚とは必ずしも恋愛の延長線上にあるわけではなく、社会通念上の慣例に近いものであることは、よく知られていることである。21世紀の日本では、男女合わせて約3割の者が生涯独身であり、必ずしも結婚が当たり前ではない。しかし、それでも7割の者は結婚するのであり、多数派を占めるのである。19世紀のフランスでも結婚が通例である事は、想像に難くない。通例であり、慣例に基づくものである以上、この『ボヴァリー夫人』が扱う結婚についても、相思相愛ばかりが結婚ではないはずである。そこには義務と寛容、そして幾ばくかの忍耐が期待されているのである。

医師のもとへ嫁ぐという金銭面、そして社会的にも恵まれた結婚は、本来危険を冒して放棄するものではないはずである。夫からのひどい仕打ちを受けているならまだしも、主人公エマは夫から「心から美しい女性を一生自分のものにしてきたのだ。自分にとって世界は妻の下着の感触の柔らかなあたりに限られているようなものだ。愛情の足りなさを心配し、妻の顔を何度も見たかった」(“ il possédait pour la vie cette jolie femme qu'il adorait. L'univers, pour lui, n'excédait pas le tour soyeux de son jupon; et il se reprochait de ne pas l'aimer,

il'avait envie de la revoir ”)(96)と一心に愛を受けている状態なのである。結婚している状態としては、悪い立場ではないのである。医師の妻という生活の安定性、娘、夫からの愛情と、恋愛感情がないにしても、捨てるべき結婚ではない。

ではなぜエマは、この安定した結婚生活を捨ててしまうのだろうか。エマの欠陥について19世紀の代表的批評家、チャールズ・オーガスティン・サント＝ブヴ(Charles Augustin Sainte-Beuve)は、「彼女が持つこともせず、彼女が知ることが出来ないのは、人生を可能にする必要な条件とは、退屈に耐える能力であるということである。知ることのない美德なのだ」(“ The virtue she lacks stems from her failure to learn that the necessary condition to make life possible is the ability to tolerate ennui ”)(396)とエマの非を述べている。確かにエマは明らかな夫への不満に嫌気がさしているのではなく、不安全感という曖昧な感情によって夫から離れていくように思える。一度夫から感情が離れると加速度的に夫への嫌気は増していき、やがてはっきりとした嫌悪、憎しみと変わっていくのである。しかし、感情が離れ始める発端というのは、サント＝ブヴが言うように夫の退屈さという曖昧な感情である。⁴ここでは、夫への嫌気が始まった初期のエマの様子を引用してみたいと思う。

[E]lle possédait enfin cette passion merveilleuse qui jusqu'alors s'était tenue comme un grand oiseau au plumage rose planant dans la splendeur des ciels poétiques; et elle ne pourrait s'imaginer à présent que ce calme où elle vivait fût le bonheur qu'elle avait rêvé. [. . .] (105)

エマは今までバラ色の翼の大きな鳥のように詩的な大空の中を飛び回っている素晴らしい情熱が、ついに自分のものになったと思っていた。しかし、今その中に生きているこの平穏さは、いつも夢見ていた幸福とは決して思

うことが出来なかった。

まさに平穏さという退屈に我慢が出来ないエマなのではないだろうか。結婚とは必ずしも大空を飛び回っていく情熱を持って行うものではなく、もっと現実的で地に足のついたものである事は、衆人の知ることである。詩的という言葉を使っているように、彼女は結婚を自分の自由な想像力によって定義しているのである。⁵現実を見ていない彼女の空想の力によって結婚の自分にとってのあるべき姿を追い求めていると言えるであろう。医師の妻であり、娘を持ち、夫から優しい扱いを受けているエマである。彼女はこの通念上の充足状態に満足することが出来ず、不足感と不全感によって夫を避け、結婚生活を壊していくのである。サント＝ブーヴの評はエマの状態を的確に指摘していると言っているであろう。

チャールズ・ボードレール(Charles Baudelaire)の言う「彼女は夫の明らかな肉体的欠陥や偏狭さによって腹立たしさを感じているのではなく、夫の天性の全くの無さと知的性質の欠陥によって腹立たしさを感じているのだ」(“ she is much less incensed by the obvious physical shortcomings of her husband or by his glaring provincialism, than by his total absence of genius, his intellectual ineptness ”)(408)という今の結婚に不満を覚えるエマであるが、これは他に別の男性がいるから、夫に不満を持つというのではなく、実際にははつきりしない理想の男性像を思い描くから、このように感じるのである。いわば見えない男性、見知らぬ男性を追うエマなのである。見えない男性を知ろうとするがゆえに、現在見えている夫という存在が、疎ましいのである。見えない男性について憧れを持つエマの様子がわかる一節をここで引用してみたいと思う。

Avant qu'elle se mariât, elle avait cru avoir de l'amour; mais le bonheur

qui aurait dû résulter de cet amour n'étant pas venu, il fallait qu'elle se fût trompée, songeait-elle. Et Emma cherchait à savoir ce que l'on entendait au juste dans la vie par les mots de félicité, de passion et d'ivresse, qui lui avaient paru si beaux dans les livres. [. . .] (97)

結婚するまでのエマは恋を知っているように思っていた。しかしその恋から生じるはずの幸福は来ず、自分は間違っていたのだ、と考えた。それで本で読んだ事のある至福や情熱、陶酔などの言葉で表されるあんなに美しく思われたものが、世間では正確にどんな意味なのかを知ろうとした。

エマはレオン(Léon)やロドルフ(Rodolphe)というように男性的な資質によって異性を求めていくが、その根源にあるものは、見えないものへの憧れなのである。女性であるエマは、言わば異性の探求によって、その見えない憧れの獲得を目指す事になるのである。異性の探求による憧れの実現を目指すエマは、性を強く読者に意識させる。その意味で、男性が異性を求める性の探求に近い存在であると言えるであろう。その意味でエマの姿は男性的と言える。「実際には起こらなかった出来事、違った生活、見知らぬ夫」(“ ce mari événements non survenus, cette vie différente, ce mari qu'elle ne connaissait pas ”)(111)を求めるエマの姿は、理想の男性像に現在とは違った地位を描くことになる。恋の憧れの実現は、自分自身の地位の上昇と強く結びついているのである。上昇気流という願望はエマを説明するのに適切な表現と言えるであろう。

地位という「勲章」(“ une brochette de croix ”)(133)を求めるエマは、自分が不満に思っている夫に対してもこのような矛盾する考えを示している。「自分の姓になったこのボヴァリーの名が広く知られ、本屋に並び、新聞で繰り返され、フランス全土で知られるようであったら、と望んだ」(“ Elle aurait voulu que ce

nom de Bovary, qui était le sien, fût illustre, le voir étalé chez les libraires, répété dans les journaux, connu par toute la France ”)(133)。夫を避けながらも自分の姓が有名になる事を望むエマは、単純に名声が欲しいという願望を抱いているのである。夫を嫌いながらも夫の姓である「ボヴァリー」が知られる事を望むのは明らかな矛盾である。これはエマが望む「勲章」に他ならないのである。見えない男性の願望は、見えている実際の夫という存在を変化させても、実現させようとするものなのである。エマの追い求める男性像の不可能性と矛盾は、はっきりしているのである。

男性的資質を表すものに権力志向と優越志向というものがあるが、エマにこの特徴はあてはまるのではないだろうか。先に説明した異性という性の探求も男性的であり、この地位を求める彼女の願望も男性的である。見えない男性の理想像の獲得は、上昇気流と深く結びついており、エマの男性的性格が明らかなのである。エマのロマン的空想の特徴、それは男性的性質を持つ上昇気流と見えない理想の探求と言えるのではないだろうか。

2 . 現実の放棄、守り手の放棄

『ボヴァリー夫人』のエマは、不全感を解消するために手に入れられない理想を手に入れようとする充足を目指す行動が特徴的であった。『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンは一体どうなのだろうか。作品タイトルが表すように何かをつかまえようとする能動的姿勢がこの青年には見られるだろうか。作品の書き出しは、自分がどこで生まれたとか、少年時代はどうであったかとか、両親は何をやっていた人なのか、という事を読者は知りたいと思うかもしれないが、「実をいうとそんな事は、自分はしゃべりたくないんだ」(“ I don't feel like going into it, if you want to know the truth ”)(1)というように否定からはじまってい

るのである。3つの高校を成績不良で除籍となっているこの主人公の逃げの姿勢が暗示されている、と云っていいのではないだろうか。

ホールデンのクリスマス休暇に入る前のこの3日間の行動の記録は、逃げの行動記録なのである。⁶ホールデンが心を許す妹のフィービー(Phoebe)と会った彼は、次のような会話を妹としている。退学について「まあ、何でそんな事したのよ」(“ Oh, why did you do it? ”)(151)と理由を尋ねるフィービーにホールデンはこのように答える。

‘ A million reasons why. It was one of the worst schools I ever went to. It was full of phonies. And mean guys. You never saw so many mean guys in your life. For instance, if you were having a bull session in somebody’s room, and somebody wanted to come in, nobody’d let them in if they were some dopey, pimply guy. Everybody was always locking their door when somebody wanted to come in. [. . .] (151)

「理由ならたくさんあるよ。あの学校は僕が行った中で最低のところなんだ。インチキ野郎が一杯さ。それから下司野郎も。あんなにたくさん、下司が集まっている所は君も見ることがないと思うね。例えば、誰かの部屋でいやらしい話をやっているとする、そこへ誰かが入って来ようとする。でもそれがうすのろのニキビ面の男だったりすると、誰も入れてやらないんだ。入りたがる奴がいると、いつでもみんなドアに鍵をかけてしまうんだ。……

フィービーの尋ねる退学の理由とは、とうてい言えない説明である。6歳年下の妹にしゃべる事で安心をしているホールデンが表されている。小さな子供が嫌な事があった時に、母親へしゃべり続ける様子とこの場面は似ていないだろ

うか。母親の役割を担っている10歳の妹フィービーである。本来ならば、6歳下の妹は、ホールデンが導くべきであり、安心を与えるべき存在である。守ってもらう存在ではないのである。ホールデンは、母親の役割をしているフィービーに精神的に守られている事をこの場面は伝えているのである。本来ならば守るべき存在に、逆に守られているホールデンは、この意味でも消極性を感じさせるのではないだろうか。

ホールデンがよく使う「インチキ」という言葉もここで使われているが、自分にとっての本当のものを手に入れようとする姿勢は、ホールデンに見出す事は出来ない。学校や社会を罵倒はすれども、挑戦して変えていこうとする行動は見られないのである。ただ、精神的に逃げを繰り返し、自分より弱いものであるはずの妹にさえも、頼ってしまっているのである。ホールデンが現在、不足の状態にあるのは明らかであるが、彼には不足を埋めようとする上昇の気持ちは見いだせないのである。『ボヴァリー夫人』のエマが不足の状態からの上昇を目指したのとは、性格を異にしていると言っていいたいだろう。

ホールデンが冬の間のアヒル、両親に手を引かれた幼子、奉公する尼僧などの弱者に優しさを見せるのは、自分自身と弱い存在であるそれらを重ねているからである。戦うことを避け、逃げの心持ちであるホールデンは、自分と同じような存在を無視することが出来ないのである。それゆえ酔った状態で凍った池の周りのアヒルを探しにいくなどという狂気の行動をとるのである。弱い者が弱い者に引き付けられるのは、それほど不思議な事ではない、と言えるのではないだろうか。ホールデンは不足の解消を目指す、精神的な積極性という心は持っていないのである。

この節のはじめに作品タイトルの(“Catcher”)に言及して、何かを捕まえようとする能動的な特徴を感じさせる、と説明を行った。実際のホールデンは能動的ではなく消極的である。この作品の出版時期を考えて、ジョン・シーライ(John

Seelye)は作品タイトルと戦争を結びつけて論を展開しているので、ここで紹介してみることにする。1949年に16歳であるホールデンは、まさに朝鮮戦争に参加できる年齢の前夜である。第二次世界大戦直後に作品が書かれている事を考慮に入れたならば、戦争の影響を作品に読み込む事は、それほど見当違いの事ではない、というのがシーライの分析なのである(29)。シーライは「もし語りとしての Catcher が広げられた死の願望であるのなら、下にある運命論的なものは、自己と世界の破壊という黙示録的な空想である」(“ If Catcher as a narrative is an extended death wish, then underlying that fatalism is an apocalyptic fantasy of self- and universal destruction ”)(30)と述べている。つまりシーライは、ライ麦畑で遊んでいる少年たちを「捕まえるもの」(“ Catcher ”)は、時代の大きな不可抗力と考えているのである。この場合、捕まえられてしまうのは、ホールデンたち若者ということになるであろう。作品のタイトルは戦争の影響を考えた場合には、かなり否定的な様相を帯びることになる。

私はホールデンと作品に対して否定的な見方をする事には反対しない。シーライによる戦争の影響という暗い見方にはこの点で一致を見るものである。しかし、私は作品タイトルそのものは、能動的性格を持っていて、それを実行できていないホールデンというように論を進めたいと思う。私の考える(“ Catcher ”)は捕手であり、守り手としての存在である。ホールデンは大人の欺瞞と汚れから子供たちを守ろうとする役割を演じようとするのである。それゆえ博物館での猥褻な落書きに激怒し、子供が見たらどう思うか、と悲しい気持ちになるのである。⁷しかし、実際のホールデンは守り手となるには、あまりにも無力であり、頼りのない存在である。彼に一番近い守るべき存在の妹フィービーでさえ、守るところか精神的に守られている状態なのである。守り手としてのホールデンの無力さを象徴的に表している次の箇所をここで引用してみたいと思う。フィービーたち子供がメリーゴーランドで遊ぶ場面である。

All the kids kept trying to grab for the gold ring, and so was old Phoebe, and I was sort of afraid she'd fall off the goddam horse, but I didn't say anything or do anything. The thing with kids is, if they want to grab for the gold ring, you have to let them do it, and not say anything. If they fall off, they fall off, but it's bad if you say anything to them. (190)

子供達はみんな例の金色の輪をつかもうとしていた。フィービーも同じ事をやっていたので、僕は木馬から落ちるんじゃないか、と心配していたけど何も言わず、何もしないで、黙ってやらせておいた。子供は金色の輪をつかもうとした時には、それをやらせておけばいいんで、何も言っちゃいけないんだ。落ちるときには落ちるけど、何もいっちゃいけないんだ。

子供が木馬から落ちてしまうのをそのままにしてしまってもいい、という守り手の役割の放棄である。ホールデンは子供たちの守り手になろうとしたはずである。彼は自分で決めたその役割を自ら放棄したのである。大人の欺瞞と汚れを嫌い、子供たちをそれから守ろうとしたホールデンの意思を、このメリーゴーランドで木馬からの落馬をそのままにする、という守り手の放棄によって、自ら捨てたのである。⁸つまりあきらめである。

「守り手」としての(“Catcher”)をホールデンは実行する事が出来ず、作品タイトルとは違った状態を示しているホールデンである。シーライは作品タイトルそのものに否定的解釈を読み込んだが、私は作品タイトルの「守り手」というプラスの役割を実行できていないホールデンを示す事によって、ホールデンと作品の否定的解釈を示したのである。先に説明した、「実をいうとそんな事は、自分はしゃべりたくないんだ」という否定文からはじまるこの作品は、消極性と

逃げ、そしてあきらめ、という下降のベクトルを示しているのである。

『ボヴァリー夫人』のエマが見えない理想を求める主人公なら、ホールデンは現状をあきらめる、という見えている現実に対しての受諾であろう。その現実、ホールデンの疲れ果てた後での精神病院入院に代表されるように、決して望ましい現実ではない。自分の現実を変えようとする意思がホールデンにあるかどうかは、最後まで作品中で示されていない。ただ、現実につぶされ、あきらめているホールデンを我々は見るのである。ホールデンは、消極性によって見えている現実から逃げ、そしてあきらめるといふ下降と放棄を特徴とする登場人物と言えるであろう。

結論

ここまで『ボヴァリー夫人』のエマと『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンについて説明し、二人の現実につぶされる様子の違いについて明らかにした。エマは充足している生活の中で見えない現実を追い求め、男性的な資質によって上昇を目指すがゆえに、現実との衝突があり、自殺という悲しみを経験するのである。ホールデンは不足している状態から、充足を目指すのではなく、見えている現実から守り手としての役割を放棄するという、逃げとあきらめが特徴的であった。エマとは反対に下降の気流により、現実につぶされるのである。

エマは死の直前で、「はっきりとした大声で鏡を要求し、しばらくの間のぞきこんだ」(“ d'une voix distincte, elle demanda son miroir, et elle resta penchée dessus quelque temps ”)(471)のだが、この鏡の要求はエマの女性的性格の、最後における復活であり、男性的性格を忘れた瞬間である、と言えるであろう。鏡をのぞき込む仕草はきわめて女性的であり、死を前にして思い出した、エマの遠い昔の姿とする事ができる。しかし、彼女の死は鏡による身づくろいという女性

性を否定するものであり、「髪はほぐれ、瞳は座り、口は大きく開いていた」(“*lex cheveux dénoués, la prunelle fixe, béante* ”)(472)という醜さを表わしている。鏡による身づくろいという女性性を否定しており、この死に方によっても彼女の男性性は明らかと言えるであろう。

ホールデンの名前と彼の性格について興味深い批評を行っているミカエル・コーワン(Michael Cowan)は、「ホールデンは登場人物として人生の避けられないような変化に直面する。しかし、彼の名前が曖昧にはあるが、“hold on”というように意味しているように、変化しまいとする経験と価値観に固執するのだ」(“Holden, as a character, confronts change as an unavoidable part of life while (as his name suggests) trying to “hold on,” if ambivalently, to experiences and values not to subject to change”)(361)と説明している。変化しようとしなないホールデンに打開の意思は期待すべくもない。精神病院に入院中のホールデンは次のような発言をしている。

That's all I'm going to tell about. I could probably tell you what I did after I went home, and how I got sick and all, and what what school I'm supposed to go to next fall, after I get out of here, but I don't feel like it. I really don't. That stuff doesn't interest me too much right now. (192)

僕の話したいのはこれで全てだ。家に帰ってどうしたとか、どうして病気になったとか、この病院を出たら秋からどの学校に行くようになるとか、言ってもいいけれど、あまり気が進まないんだ。本当なんだ。今のところそういうことには、あまり興味が湧かないんだ。

学校に戻ってから勉強をきちんとやって完全な復活を目指す、という強い意

志は見られないのではないだろうか。しかし、嫌でも学校というルールの中に居なければならないホールデンなのである。彼がいくら変化しないことを望んでも、それは無理な願望である。

本稿の論題は現実につぶされるリアリズム時代の代表作『ボヴァリー夫人』のエマと実存的リアリズム時代の代表作『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンの現実につぶされる性格の違いを明らかにする事であった。エマは充足しているはずの現実から上昇を目指し、到達できない見えない理想を追ったために悲劇を経験した。いわば型からの脱出による悲劇である。ホールデンは、今ある現実から逃れあきらめているがゆえに、悲しみを経験しているのであり、学校に戻って普通の生活をするという規範への進入の期待によって、つらい思いをしているのである。つまり、型への進入の期待による悲しみである。エマとホールデン、二人が現実につぶされて、悲しくなるのは、型からの脱出と型への進入、この正反対の要因によるものなのである。これが本稿の論題の答えである。

時代と国は違っているが、自ら原因を作って悲劇となるこの『ボヴァリー夫人』と『ライ麦畑でつかまえて』は、大学の仏文科と英文科の中で、学生に人気のある作品であろう。互いに影響を及ぼしているとは言えない両作品の比較は、共通点をあげた上での対比を明らかにする事で、それぞれの作品がより鮮明になったのではないだろうか。比較文学研究とは必ずしも影響のみを調べるのではなく、対比の研究も実際に行われている。恣意的ともいえる二作品の選択による対比は、今後の比較文学研究の中で、重要性を増していくのではないだろうか。この根底には原点テキストの尊重という、批評理論の古典、ニュー・クリティシズムが響いているのは言うまでもない。

註

- 1 . 以下、『ボヴァリー夫人』からの引用は、Gustave Flaubert, *Madame Bovary* Ed. Jacques Neefs, Le Livre de Poche, 2016 の版による。
- 2 . 以下、『ライ麦畑でつかまえて』からの引用は、J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*, Penguin Books, 1994 の版による。
- 3 . ヘンリー・ジェームズ自身がヨーロッパとアメリカの対比を特徴とする国際状況小説とともに、心理的リアリズム文学を開拓した作者である事を考えるならば、意識に注目したことは驚くにあたらない。『ある婦人の肖像』では、作者自身が序文で女性の意識に中心を置くと述べているし、女性の意識に関心が向かったのは、当然のことかもしれない。
- 4 . ただし、小説の書き出しにおいて、夫の幼少時代を描写しており、彼の愚鈍さを強調するのに十分である。新入生として迎えられた彼が、先生に名前を尋ねられ、3度も言われなければ自分の名前を言えない様子などは、彼のいわゆる意気地のなさが伝わってくる。妻の不倫に気づかない様子も、妻を疑う事を知らない彼の精神的鈍さを表わすのに十分である。
- 5 . エマの想像力という感性は、彼女が弾くピアノにも表わされているのではないだろうか。音楽教育がそれほど珍しい事ではなかったのかどうかは定かではないが、エマはピアノを弾くのである。彼女の感性の鋭さを表わすものとして、夫の鈍さとは対照的である。音楽と感性、自由な想像力というのは、結びつきやすいものではないだろうか。
- 6 . ホールデンのこの3日間の彷徨は、ある意味旅である。空間の移動という意味でも旅であり、精神的にも逡巡し、あちらこちらに意識が向かっていくのは、精神的な移動であり、旅と言えるであろう。この小説のエピソードの連続は、その時々ホルデンの気持ちを表わすエピソードである。

- 7 . ホールデンはミイラに強い関心を示しているが、死んで変化しないミイラと変化をしたくない自分を無意識に重ねているのであろう。自分が関心を示す変化しないミイラがある博物館、つまり自分の心の拠り所がある場所を落書きで汚される事は、自分が失いたくない子供という汚れのない存在を汚される事と同じなのである。変化しないミイラのある博物館とホールデン、子供はつながった存在である。
- 8 . いくら大人の欺瞞と汚れをホールデンが嫌ったとしても、彼自身が背伸びをして女を金で買ったという経験は、大人の汚れそのものである。大人を嫌いながらも大人の汚れを欲したホールデンは、矛盾した存在である。守り手になろうとしたホールデン自身がすでに汚れた存在である、と言うことができる。

引用・参考文献

- Baudelaire, Charles. “ *Madame Bovary*, by Gustave Flaubert. ” *Oeuvre*.
Ed. Y. G. Le Dantec. Paris: Bibliothèque de la Pléiade, 1951. 995-
1005. Print.
- Brookeman, Christopher. “ Pencey Preppy: Cultural Codes in *The Catcher
in the Rye*. ” *New Essays on The Catcher in the Rye*. Ed. Jack Salzman.
New York: Cambridge UP, 1991. 57-76. Print.
- Cowan, Michael. “ Holden’s Museum Pieces: Narrator and Nominal
Audience in *The Catcher in the Rye*. ” *New Essays on The Catcher in
the Rye*. Ed. Jack Salzman. New York: Cambridge UP, 1991. 35-
55. Print.
- Flaubert, Gustave. *Madame Bovary*. Ed. Jacques Neefs. Paris: Le Livre
de Poche, 2016. Print.
- James, Henry. “ Style and Morality in *Madame Bovary*. ” *Notes on Novelists
with Some Other Notes*. Ed. Henry James. New York: Charles
Scribner’s Sons, 1914. 59-66. Print.
- Man, de Paul. “ Introduction. ” *Madame Bovary*. New York: Norton, 1965.
Print.
- Rowe, Joyce. “ Holden Caulfield and American Protest. ” *New Essays on
The Catcher in the Rye*. Ed. Jack Salzman. New York: Cambridge
UP, 1991. 77-95. Print.
- Sainte-Beuve, Charles Augustin. “ *Madame Bovary*, by Gustave Flaubert. ”
Causeries du Lundi. Print.
- Salinger, J. D. . *The Catcher in the Rye*. London: Penguin Books, 1994.

Print.

Seelye, John. "Holden in the Museum." *New Essays on The Catcher in the Rye*. Ed. Jack Salzman. New York: Cambridge UP, 1991. 23-33.

Print.

Shaw, Peter. "Love and Death in *The Catcher in the Rye*." *New Essays on The Catcher in the Rye*. Ed. Jack Salzman. New York: Cambridge UP, 1991. 97-114. Print.